

自然言語における文法的機能の表示を支配する原理

町田 健(研究代表者)

名古屋大学大学院文学研究科

0. 序論

自然言語の本質的機能は事態の伝達である。事態を表示する言語単位を「文」と呼ぶ。Wittgenstein(1922)の主張する通り、事態の認識は言語を通してのみ行われるのであるから、事態の構造は自然言語の与える文の構造をもとにすることにより得られる。言語を媒介としない事態の直接的認識があり得ないとすると、言語が表面的には多様であることは自明の事実であるから、異なった言語を使用する人間が認識する事態には共通性がないということになる。

事実、言語相対論においてはかかる事態認識の様態が主張されているのであるが、これを反駁する根拠はある。それは、異なった言語間での相互翻訳が適切に達成されているという誰にでも知られた事実である。翻訳とは、ある言語で作られた文が表示する事態と同一の事態を、それとは別の言語の文によって表示する過程である。同一の事態を異なった言語によって表現することが可能であるのだとすれば、異なった言語を使用する人間であっても同一の事態認識が達成されていると結論できることになる。

しかも翻訳は任意の複数の言語間において可能であるのだから、この結果として、同一の事態を任意の言語によって表示することができると考えてよい。すなわち、使用する言語が何であれ、人間の事態認識には普遍性があり得るということである。

当然のことながら、翻訳によって果たして同一の事態が表示されているのかという疑問は残る。異なった言語の文によって表示された事態が、もとの言語で表示されていた事態と同一であることを確認するための厳密な手続きは、現在のところ未だ提案されていない。しかしながら、翻訳の一種である通訳の実態を観察してみると、起点言語において表示されていた事態が正しく理解されたとすれば実現するはずの行動が、目標言語の文のみを理解することによっても実現していることが分かる。たとえば、起点言語において何らかの命令が行われたとする。この命令を表示するはずの目標言語の文を聞いた人間は、確かに命令が行われた場合に期待される行動をとるのが通常である。

Bloomfield(1935)における意味と、それに対する反応の同一視に見られる誤謬をここで犯すわけにはいかないが、通訳を介した翻訳の場面で、異なった言語によって同一の事態が表示されて理解されているのは、恐らく疑うことのできない事実である。さらにまた、文書の翻訳であったとしても、翻訳文が原文と同一の事態を表示していることを疑わしめる事実は確認されない。ヨーロッパ共同体や国際連合のような、多言語が日常的に使用される機関においては、大量の文書が日

々複数の言語に翻訳されることによって業務が遂行されているのであるが、これらの機関においては、翻訳の達成する同一の事態表示の実現は当然の前提である。そして、この前提を覆す事実は知られていない。

以上より、同一の事態が、任意の言語のよって表示され得ると見なすことに不合理は認められないとしてよい。ただし、翻訳が効果的に達成されている事実によってのみ、任意の言語による同一の事態表示が可能であることを検証したとするのは、当然不十分である。翻訳が効果的に達成されていることを確認する手段の厳密化が必要であることは言うまでもないし、翻訳以外に、任意の言語による同一の事態表示がなされることを検証する事実を求める必要もある。

さらに、言語学が経験科学であるとするれば、多様な言語の文が表示する事態を分析することによって、帰納的に同一事態の表示が達成されていることを確認する方法もとられるべきである。本論は、異なった類型に属するいくつかの言語を取り上げて、事態がいかなる形式で表示されているのかを分析し、普遍的な事態表示を提示することを目標とする。文は形態素の列であり、文が表示する事態は、形態素が表示する集合^{*1}を合成することによって得られる。Saussure(1916)が主張しているように、名詞や動詞などの内容形態素に関しては、それらが表示する集合が体系をなすため、あらかじめ厳密な定義が与えられている専門用語などの場合を除いては、異なった言語で全く同一の集合に対応している二つの形態素は存在しない。^{*2}しかし一方で、意味役割や時制、法などの、いわゆる文法的な機能を表示する形態素群に関しては、異なった言語で機能の同一性が広く確認されている。このことから、異なった言語における同一の事態表示をまず保証するのは、機能形態素であると考えることができる。何より、事態の成分としての個体や事態集合の機能が明示されなければ、事態表示は完成しないのであるから、形態素の文法的機能の普遍性を探求することは、事態の普遍的特性を適切に捉えるためには重要である。

したがって本論では、文法的機能の表示を中心に、任意の言語において表示される事態の普遍的特性を解明していくことにする。

1. 日本語による事態表示

1.1. 文の構造

日本語は膠着語の代表であって、基本的な文の構造は以下のように表される(風間他1994、町田2002)。

^{*1} 本論では、形態素は個体や事態の集合を表示すると考える。名詞は個体集合または事態集合を表示し、動詞は、主体や対象などが不定の事態集合を表示する。これは、Montague (1974)などの形式意味論で採用されている、形態素の意味を集合として捉える方法と同じである。

^{*2} ただし、経験的にも観察されるように、言語が異なれば内容形態素の意味が似ても似つかぬものになることもない。内容形態素の体系によって設定される集合の性質には、かなりの共通点が見られることも確かである。

(1)文＝主題＋名詞群1＋…＋名詞群n＋述語群

主題、名詞群および述語群の構造は、以下のような形態素配列規則に従う。^{*3}

(2)主題＝名詞句＋主題助詞

名詞句＝(指示詞)＋(形容詞)＋名詞

名詞群＝名詞句＋格助詞

述語群＝動詞語幹＋助動詞1＋…助動詞n＋アスペクト辞＋時制辞＋モダリティ辞群^{*4}

述語群＝形容詞語幹＋時制辞＋モダリティ辞群

述語群＝名詞句＋断定辞＋時制辞

モダリティ辞群＝法助動詞語幹＋時制辞＋モダリティ助詞

1.2. 事態の構成要素

文は形態素の列であって、形態素は何らかの集合を表示する。形態素は、その表示する集合が事態中で果たす機能によって分類される。

1.2.1 実体集合

名詞は、個体または事態の集合を表示する(以下、「個体または事態の集合」を「実体集合」と総称する)。個体の集合を表示する名詞が「普通名詞」と呼ばれるものであり、事態の集合を表示する名詞が「抽象名詞」と呼ばれるものである。「固有名詞」は、通常は一個の個体を表示するが、これは要素の数が一個の集合であると見なすことができる。

名詞の表示する集合を、何らかの属性に基づいて限定する働きをするのが、名詞句の要素である場合の形容詞である。この機能をもつ形容詞を「限定形容詞」と呼ぶことにする。限定形容詞も、ある属性をもつ個体または事態の集合を表示するのだが、色彩を表したり、個体の成分を表したりする一部の形容詞を除いては、形容詞のみではそれが表示する集合を与えることはできない。形容詞の機能は、並列する名詞が表示する集合の部分集合を表示させることである(町田1997)。

^{*3} ここでは、従属節を含まない単純な構造の文(単文)を対象とする。従属節の表示するのは何らかの事態であって、すなわち単文と同じであるから、文法的機能の表示を考察する場合には、単文のみを対象としても一般性が失われることはない。

^{*4} ここで、添字の n の値は1であってもよい。日本語の場合、助動詞の連続は最大3個であると考えられる。モダリティ辞群としては、モダリティを表示する助動詞と、事態に対する発話者の判断を表す助詞(終助詞)がある。

1.2.2. 意味役割

名詞が表示する集合が事態中でもつ機能(意味役割)を表示するのが格助詞である。事態中の実体集合がもつ機能が適切に理解されてはじめて、事態の個別化が可能になる。したがって、いかなる言語であれ、実体集合の機能は何らかの形で表示されなければならない。

意味役割として最も重要なのは「主体」である。主体は述語群に属する語幹そして／あるいは助動詞の一部を決定する機能をもつ。^{*5}後述のように、述語群によって事態の枠組みが与えられるから、主体を表示する実体集合が選択されなければ、事態の個別化は完成しない。言語が伝達するのは個別的事態なのであるから、事態の個別化を決定する意味役割である主体は、事態に属する実体集合の中では最も重要な位置にあると言ってよい。

主体と同様に重要であるのが、主体から何らかの作用を受ける「対象」を表示する集合である。「作用」という概念は定義が不明確であって、今後さらに厳密な観点から特性を記述する必要がある。いずれにしろ、事態の性質によっては、主体と並んで重要な役割を果たす実体集合が含まれることがあり、その集合が主体に代わって自らが主体となることにより、述語群の形式に決定的に関与する可能性をもつ。次の例を見てみよう。

(3)太郎が次郎を棒でなぐった。

この(3)においては、「太郎」が主体であり、このことは格助詞の「が」によって表示されている。この文で、「次郎」は主体である「太郎」から「なぐる」という作用を受けており、したがって「次郎」の表示する個体のもつ意味役割は「対象」と言われる。ここで、「太郎」に代わって「次郎」を主体とすると、次の文が出来上がる。

(4)次郎が太郎に棒でなぐられた。

すなわち(4)においては、「次郎」が主体としての地位を占めることで、同一の {nagur-} という動詞語幹を共有しながらも、さらに {rare} という助動詞語幹が付加されている。つまり、「次郎」が主体となることで、述語群の中核となる動詞語幹は保持しながらも、新たな形態素の付加を要請したということである。

他方で、(3)に含まれている名詞である「棒」の表示する実体集合を主体としても、同一の動詞語幹を使用することによって適格な文を作ることはいできない。

(5)*棒が太郎から次郎をなぐった／なぐられた／なぐらせた。

^{*5} 主体が選択する助動詞は、「(ら)れる」「(さ)せる」という、受動、使役を意味するものである。

以上の例を見ると、「対象」という意味役割は、主体と並んで述語幹の選択に関与しながらも、異なった述語群の形式を与える機能を指すと考えることができる。この機能が、何故に主体からの「作用」を受けることと同一視される傾向にあるのか、という点に関しては、今後さらなる分析を進める必要がある。

「主体」と「対象」以外の意味役割に関しては、格助詞に分類される形態素の機能を観察することにより、以下のようなものが設定されうる。

(6) に:受容者(～に与える)、関与者(～に教わる)、場所(～にある)、目的地(～に行く)

へ:目的地(～へ向かう)

と:同伴者(～と遊ぶ)、関与者(～と会う、～と戦う)

から:起点(～から来る)

で:道具(～で切る)、場所(～で行われる)

より:比較対象(～より大きい)

これらの意味役割は、実体集合が事態中でもつ機能に対応する。しかしさらに、実体集合間の関係を表示する機能としての意味役割もある。

(7) の:所有者(～の本)、関与者(人類の誕生、橋の建設)

や:並列者(イヌやネコ)

意味役割のうち「関与者」と名付けたものは、実体集合間に認められうる何らかの関係を表示するものである。「関係」は極めて広範な概念であるから、これを果たして単一の意味役割と見なすことが妥当かという問題はある。しかしながら、関係に属する要素は、具体的な状況を勘案すれば、無限に設定される可能性がある(Dowty 1991)。こうなると、有限個の形態素によって表示され、かつ理解される意味役割には離散的な特性がなくなることになる。意味役割が連続的な特性をもつとすると、言語によって保証されるべき同一の事態の伝達が保証されないことになるから、やはり意味役割にも離散性が与えられるべきであると考えなければならない。したがって、「関与者」がさらにいくつかの意味役割に細分される可能性はあるにせよ、境界をもたない無限個の意味役割的特性が設定されることは、言語の本質としてあり得ないと思われる。

1.2.3. 事態基

事態の枠組みを、本論では「事態基」と称することにする。事態基は、主体や対象など、事態の要素である実体集合とその機能が特定化されていない事態の集合を表示する。例えば、「見た」という動詞群が事態基である場合、その事態基は、基準時点よりも前に不特定の主体が不特定の

対象を不特定の時区間^{*6}において見た、という内容の事態の集合を表示する。事態基が要求する主体や対象が、事態基に組み込まれてはじめて文が完成し、単一の事態が表示されるようになる。

事態基そのものの特性を限定するのは、アスペクト辞、時制辞、モダリティー辞、断定辞である。

日本語において、アスペクトを表示する形態素としては、「走っている」「走っていた」などの形式中に見られる {i} があるだけである。この形態素を含まない動詞形式として「走る」「走った」があり、{i} を含む形式とそうでない形式が、アスペクトに関して対立している。

アスペクトは、事態の全体または部分のいずれかが提示されたものであり(Comrie 1977, 町田 2001)、事態に関しては全体と部分の二種類しかあり得ない。したがって、日本語におけるアスペクト表示も、「全体相」と「部分相」の二種類だということになる。^{*7}

時制を表示する形態素としては、日本語には {ru} と {ta} がある。{ta} は事態が基準となる時点よりも前に成立したことを表示し、{ru} は事態が基準時点と同時かそれよりも後に成立したことを表示する。^{*8}したがって、日本語において事態の成立時点に関して、時制辞によって表示されるのは、「過去」と「非過去」の二種類となる。

ただし、先行研究によってすでに明らかにされているように(町田1989、工藤1995 など)、動詞語幹の時間的特性(動作態)と時制辞の機能を合成することにより、たとえ非過去時制であっても、基準時点と同時か、それとも後かを区別することは可能である。したがって、日本語の事態基の時制的特性としては、「過去」「現在」「未来」の三種が区別されとしても、大きく合理性が損なわれることはない。

モダリティーは、第一には事態の成立可能性に関する話者の判断を表示する(Palmer1986)。事態の成立可能性は、本質的に連続性をもつものであるが、先述の意味役割の場合と同様に、自然言語においては何らかの形態素を使用して表示される以上、離散的な性質をもつものでなければならない。

日本語においては、他の言語と同様に、モダリティー表示の形態素が述語群に付加されない時には、事態が完全に真であることが表示される。「～にちがいない」「～(の)はずだ」という形式

^{*6} 事態の成立のためには、通常は時間を要する。したがって、事態は時点において成立するというよりも、むしろ長さのある「時区間」において成立するとするのが正確である。

^{*7} 「～始める」「～終わる」「～かける」などの、いわゆる「補助動詞」によって表示される事態の局面もあることは確かである。しかし、「～始める」などについても、「～始めている」のような形式をとることが可能なのであるから、これらの補助動詞によって表示される事態についても、さらに全体と部分があり得ることになる。このことから、最も基本的なアスペクトは、やはり全体と部分だと結論することができる。

^{*8} 基準時点は、本論で分析の対象としている単文については、発話時点であるのが原則である。従属節の場合に基準時点を与えるのは、主節の述語群が与える時点となる。

が付加されれば、事態の成立可能性が高いことを、「だろう」という形式が付加されれば、事態に単なる成立可能性があることを(益岡・田窪1992、町田2002)、「かもしれない」という形式が付加されれば、事態の成立可能性が低いことを表示する。そして、否定辞の「ない」が付加されれば、事態が完全に不成立(偽)であることが表示される。したがって、日本語の場合には、表示される事態成立の可能性の程度としては、完全に成立、可能性高、可能性中、可能性低、完全に不成立の5段階があることになる。

さらに日本語では、事態の単なる成立可能性を表示する形式として、「だろう」に加えて「ようだ」と「らしい」がある。いずれの形式も、事態の成立可能性を話者が推論するための根拠となる事態が与えられていることが特徴であるが、「らしい」の場合は、その根拠となる事態が、話者が直接的に経験したものでないのに対し、「ようだ」に関してはそのような制限がない(木下1998、町田2002)。

なお、事態の成立可能性が高いことを表示する「はずだ」についても、話者がこう推論する根拠となる事態が与えられていなければならない。ただし、成立可能性が高いことを表示する形式に関しては、根拠となる事態が直接的な経験で得られたかどうかに基づく形式の区別はない。

「ようだ」「らしい」「はずだ」のようなモダリティ表示形式は、成立可能性を判断する根拠となる事態が与えられているという点で、一個ではなく複数の事態を表示するという特徴をもつ。

これらのモダリティ表示形式が表示する複数の事態のうちの一つは、成立可能性があると判断される事態の根拠だという性質があるに過ぎないから、事態としての構造は不明瞭である。この点で、副助詞の「も」を含む次のような文が、構造も明確な複数の事態を表示することができるのは異なる。

(8)花子も来た。

(9)「花子が来た」+「花子以外の人間が来た」

上の文(8)は単文であるが、(9)で与えられた内容を示す複数の事態を表示している。しかしながら、単文であっても複数の事態を表示させる機能をもつという点で、「ようだ」などのモダリティ表示形式も、「も」などの副助詞と同様の性質をもつと言える。

1.2.4. 主題

日本語の事態表示に関する重要な特徴は、文が使用される状況中に与えられている実体集合が、文の表示する事態の要素として含まれることを表示するための形態的手段があることである。この機能をもつ実体集合を「主題」と呼び、主題を表示する形態素は、名詞に後接する助詞の「は」である(野田1996、町田1999)。

主題である実体集合はまた、事態基が表示する集合の性質を限定するという機能をもつ。すなわち、主題である実体集合の性質に適合するように、事態基に対応する集合の性質が決定され

るということである。次の例を見てみよう。

(10)a.花子は美しい。

b.花子が美しい。

上の(10a)においては、「花子」が表示する1個の個体が主題である。一方で、事態基を表示する述語としての形容詞「美しい」は、主体が不定である事態の集合を表示する。主体が不定であるから、表示される事態の個数は無限個である。ここで、主題である「花子」が1個の個体を表示していて、これが事態基の集合の性質を決定するから、文として合成される時には、事態基の集合の個数も1個に限定されることが、「花子」が主題として与えられた段階ですでに聞き手には分かっている。

これに対して(10b)においては、「花子」が与えられた段階では、この形態素が表示する個体が、後続する述語群によって与えられる事態基の中で、主体としての機能をもつことが理解されるのみである。そして「美しい」が与えられた段階で、ようやく事態基がいかなる特性のものであるかが分かる。上述のように、述語群としての「美しい」は主体が不定の無限個の事態を表示する。「花子」は主題ではないから、事態基に対応する集合の性質を単独で限定することはできない。

この時、主体が1個の個体であるのに対して、事態基は無限個の事態であるから、両者は明らかに適合しない。このことから、主体の個数に適合するように、事態基の表示する事態も1個に限定されることになり、最終的に(10b)は1個の事態を表示する。事態基の表示するはずの事態集合の残りの要素は、この過程で不成立だったものとして排除されるのだから、この文においては、花子である個体以外の個体は事態の主体ではない、言い換えれば花子以外の個体は美しくないという「排他性」(野田1996)の意味が生じることになる。

1.2.5. 事態の構造

日本語の文が表示する事態の要素としての実体集合、意味役割、事態基、主題の特性が以上のようなものであるとすれば、日本語において表示される事態の構造は以下のような形で表される。ただし、 e_i は実体集合を表す。

(11)日本語の文が表示する事態の構造

主題= e_t

事態基

アスペクト{全体、部分}

成立時区間{過去、現在、未来}

成立可能性{完全、高、中、低、不成立}

事態基の要素

主体= e_1 、対象= e_2 、受容者= e_3 、関与者= e_4 、同伴者= e_5

道具 = e_6 、場所 = e_7 、目的地 = e_8 、起点 = e_9 、比較対象 = e_{10}

同時的に表示される事態

事態をE、事態基をB、アスペクトをA、成立時区間をT、成立可能性をM、同時的に表示される事態をE'で表すとする、日本語の文が表示する事態は、一般的には次のように表示される。

(12) E: $e_i \parallel B\langle A, T, M \rangle [e_1 \dots e_{10}] + E'$

例えば、次の(13)が表示する事態は、(14)のように表される。

(13) 太郎は花子に数学を教えているようだ。

(14) E: 主題 = 太郎 \parallel 教える < 部分、現在、可能性中 > [主体 = 太郎、対象 = 数学、受容者 = 花子] + E'

E'で表される、同時的に表示される事態の構造は、状況によって与えられる、Eを推論する根拠として適切な事態である。

2. 英語による事態表示

2.1. 英語の文の構造

英語は起源的には屈折語であるが、音韻変化に由来する形態的変化の結果、現在では孤立語的な類型に属する言語となっている。したがって英語においては、意味役割のうち主体と対象は必ず語順によって表示されるし、受容者も、統語的制約はあるものの、語順によって表示されることができる。^{*9}

英語には、日本語と異なり、主題を表示する統語的、形態的手段はないが、疑問詞が文頭に位置するという特徴がある。この配列特徴は、英語が属するインド・ヨーロッパ語に共通であり、ギリシア語やラテン語のような屈折語であるインド・ヨーロッパ語も、同様に疑問詞が文頭に位置する構造を示す。英語と同様の孤立語的特徴を示す中国語は、日本語と同じく、疑問詞であっても、

^{*9} He gave it to me.は適格でも、He gave me it. が適格でないように、人称代名詞が2個連続して、最初のものが受容者を表すような構造は、英語では許されない。

その意味役割に応じて、他の名詞と同様の位置に配置される。^{*10}

英語の文の基本的構造は、以下のような形で与えられる。

(15) 文 = 名詞句 + 動詞群 + (名詞句) + (名詞句) + (名詞群)^{*11}

名詞句 + 動詞群 + 形容詞 + (名詞群)

疑問詞 + 動詞群 + (名詞句) + (名詞群)

疑問詞 + 動詞群 + 形容詞 + (名詞群)

疑問詞 + 助動詞 + 名詞句 + 動詞 + (名詞句) + (名詞群)

名詞句 = (限定詞) + (形容詞) + 名詞

名詞 = 名詞語幹 + 接辞

名詞群 = 前置詞 + 名詞句

動詞群 = (助動詞) + (助動詞) + 動詞

動詞 = 動詞語幹 + 接辞

2.2. 事態の構成要素

事態に必須の構成要素である実体集合や事態基そのものは、すべての言語に共通である。したがって以下では、先に考察した日本語の事態表示とは異なる特徴についてのみ検討する。¹

2.2.1. 実体集合

a. 数の区別

英語の名詞には、単数形と複数形の区別がある。単数形は無標の形式であって、名詞に接辞が付加されていない時、名詞が個体集合を表示するものであれば、その集合に属する1個の個体を表示する。ただし、液体や不定形の個体のように、個体としての認識が困難な物質を表示する名詞の場合には、単数形は物質全体の部分を表示する。

名詞が事態集合を表示するものである場合には、単数形は事態集合の全体を表示する。物質を表示する名詞の場合に、単数形が部分集合を表示し、事態を表示する名詞の場合には、これとは異なって集合の全体を表示するのは、表示の規則に一見統一性がないように思われる。しか

^{*10} インド・ヨーロッパ語において、疑問詞が文頭に配置される理由は、今後意味論的な観点から解決されなければならない問題である。

疑問詞が文頭にあれば、その疑問詞が与えられることで、文が疑問文であることがただちに理解されるという利点がある。一方で、英語のように疑問詞が基本的には語形変化を行わない言語では、疑問詞の意味役割が、語順によって表示されないという不便もある。

したがって、文が表示する事態の理解の効率性という観点からすると、疑問詞が文頭にあることは、必ずしも効率性を高めることにはならない。

^{*11} 「名詞群」は、従来「前置詞句」と呼ばれる単位である。すなわち、前置詞の後に名詞句が後続して作られる単位を意味する。

しながら、事態集合の性質を考慮するならば、このような表示状態の相違は、特に不思議なものではない。

物質の集合は、それに属する部分としての各要素がそれぞれ異なっているのは当然であるにしても、要素間に大きな同一性がある。たとえば water(水)によって表示される物質であれば、その部分としての液体は、少なくとも通常感覚では、どれもが同じに見える。cat(ネコ)によって表示される個体に関しては、それぞれの個体に相違を認めるのは容易であるが、同時に外見のあるいは行動的な同一性を認めることも困難ではない。すなわち、物質の集合については、その任意の部分集合が、すべて同一の性質をもっていると言うことができる。

一方、事態集合の場合、たとえば love(愛情)という名詞を考えてみると、この名詞が表示することのできる個々の事態は、極めて多様である。「ある母親が自分の子供をやさしく抱きしめる」、「ある宗教家が信徒たちに困難を克服する方法を教える」、「ある為政者が自分の支配する人民たちの貧困を救う努力をする」など、この名詞が表示すると見なされる個々の事態は、それぞれ事態として見てみれば、全く共通性はない。これらの多種多様な、無限個の事態を包括する集合としてloveという名詞が与える集合が設定されているのである。したがって、このような事態集合に関しては、それに属するすべての事態が全体として一つの特性を表示しているのであり、その任意の部分を取り出したとしても、その部分が他の部分と同じ性質をもっているという保証はない。したがって、事態集合に関しては、その部分集合を抽出して表示することは、集合の性質を変更することになりかねない。このことから、事態集合は常にその全体が提示されなければならないのだと考えることができる。

名詞の複数形は、個体集合の部分集合のうち、要素が2個以上のものを表示する。個体の場合には、その間の境界が明確であり、1個の個体と2個以上の個体を区別して認識するのは容易である。集合に属する個体の個数は無限であるから、2個以上の個体に関しては、さらにそれ以上の個数を形態的に区別すると、無限個の形式が必要になるし、個数を明示するには特別の形態素(数量詞)を使用すればよいのだから、名詞そのものの形式としては、単数と複数を区別すれば十分である。言語によっては、「目」や「手」など通常は対になったものとして認識される個体を表示するために、「両数」または「双数」と呼ばれる形式を区別するものもある(古典ギリシア語やサンスクリット語など)。ただし、両数で表示することのできる個体集合の数は極めて少数であるので、両数形の形式としての効率性は低い。

単数形と複数形の形態的区別があることにより、英語の名詞が表示する実体集合の表示に関しては、「単数」と「複数」を区別する必要がある。さらに、同じ単数形であっても、名詞が表示する実体集合の性質によって、その部分または全体が表示されるという違いが生じるため、実体集合が物質から成るのか、それとも事態から成るのかを区別する必要もある。

b. 定性

英語には冠詞があるため、実体集合の特性として「定」と「不定」の区別が表示される。「定」は、

任意の集合に関して、その集合が属する全体集合の他の要素と明確に区別される根拠が、状況によって与えられていることを表す。一方で「不定」は、全体集合に属する他の要素と区別される根拠が、状況によって与えられていないことを表す。

例として、次の各文を見てみよう。

(16) a. I met a girl near my house.

b. I met the girl you spoke of the other day.

(16a)の girl は、girl(少女)が表示する個体集合の要素である1個の個体を表示する。この状況中には、この個体を同じ集合に属する他の個体と区別するための根拠は与えられていない。この性質を表示するのが不定冠詞のaである。一方、(16b)では、girl に後続する関係節 you spoke of the other day によって、この名詞が表示する個体が、他のgirlである個体とは明確に区別されることが示されている。この性質を表示するのが定冠詞のtheである。

集合中の他の要素と区別されるということは、別の言い方をすれば、聞き手が理解する要素と、話し手が意図している要素が同一であることが文の伝達によって達成されるということである。すなわち、集合が定である場合には、話し手が事態の要素として選択した実体集合と、聞き手がその事態表示によって同定する実体集合が同一である。一方で、集合が不定である場合には、話し手が選択した事態集合と聞き手が同定する事態集合の同一性が保証されない。

話し手が不定である実体集合を事態の要素として選択するのは、聞き手が同一の集合を同定する必要性がないと判断するからである。他方、定である実体集合が選択された場合には、聞き手が同一の集合を正しく理解することが要求されていると判断される。

「定」または「不定」の特性を「定性」(definiteness)と呼ぶ。実体集合の定性は、冠詞をもたない言語も、日本語、中国語、ロシア語、ラテン語、スワヒリ語など数多くあることから分かるように、文が使われる状況によって理解することが可能である。実際、(16)を日本語に置き換えた(17)を見れば、定性が状況によって与えられることが分かる。

(17) a. 私は自分の家の近くで女の子に会った。

b. 私は先日君が言っていた女の子に会った。

(17a)の「女の子」は、この文が表示する事態が聞き手に与えられる前には、状況中に登場していないし、この事態の他の成分によって、この名詞が表示する集合の要素である他の個体と属性が異なることが明示されることもない。したがって、話し手と聞き手の間で、事態の要素として選択される実体集合の同一性は保証されない。このことから、この「女の子」が表示する個体は「不定」として理解される。一方で、(17b)の「女の子」は、「先日君が言っていた」という関係節が先行していることから、この名詞が与えられた段階ですぐに「定」であることが理解される。

定性が状況によって与えられることは確かであるにしても、定性を表示する機能をもつ形態素によって、実体集合の定性を直接的に聞き手に理解させるほうが、言語による事態理解の効率性を高めることも、同様に確かである。同じ事態を表示することができるのであれば、形態素の数が少ないほうが、文の意味を理解する過程は、第一次的には効率性が高いと言える。しかしながら、実体集合の定性は、冠詞がない場合には状況を用いて間接的に理解するしか方法がないのに対し、冠詞があれば直接的に表示される。したがって結局のところ、冠詞の有無は集合の定性を理解する効率性を変化させることがない。この理由で、冠詞を発達させる言語とそうでない言語の二種が存在するのだと考えられる。^{*12}

なお、英語の不定冠詞はあらゆる名詞に付加されるのではない。複数形の名詞と、事態集合または不定形の物質の集合を表示する名詞が「不定」であることを表示する機能をもつ不定冠詞はない。複数の要素をもつ個体集合、事態および不定形の物質の集合を表示する名詞に関しては、名詞の前に冠詞が付加されていないこと(無冠詞)が、これらの特性をもつ集合が不定であることを表示する。

2.2.2.意味役割

英語では、上述のように、主体と対象という最も重要な意味役割は、語順(動詞群との位置関係)によって表示される。また受容者も、対象を表示する名詞の直前に位置する名詞によって表示されることができる。

それ以外の意味役割は前置詞によって表示される。英語の各前置詞が表示する意味役割は概ね以下の通りである。

(18)

for:受容者、関与者

by:近接場所、道具

with:同伴者、道具

at:点的(無次元)場所

along:線的(一次元的)場所

on:面的(二次元的)場所

in:空間的(三次元的)場所

around:周辺の場所

^{*12} ただし、歴史的に見れば、冠詞をもたなかった言語が冠詞をもつようになった例はあっても、その逆は観察されない。このことは、集合の定性を、冠詞によって直接的に表示する方法のほうが、理解の際には効率性がたかいのではないかと予想させる。

across:線的(一次元的)通過場所
through:面的・空間的(二・三次元的)通過場所
before:先行場所
after:後行場所
to:目的地(一般的)
into:空間的目的地
onto:面的目的地
from:起点
over:面的上方場所
above:点的上方場所
under:面的下方場所
below:点的下方場所
of:所有者、関与者

英語の前置詞は、日本語の格助詞よりも数が多い。このため、表示される意味役割も日本語よりも細かく分類されている。これらの意味役割を、すべて言語普遍的な意味役割として認定することができるかどうかは、さらに検討すべき問題である。特に、「場所」という意味役割に関しては、空間の次元、基準空間との関係が、役割の設定に関与しており、これらの関係は、言語によっては、前置詞あるいは助詞以外の形態素によって表示されるか^{*13}、状況によって間接的に理解されることもある。

このことから、普遍的な意味役割としては「場所」のみを設定しておいて、場所のより詳細な特性については、空間が必然的にもつ特性として、二次的な位置に据えるという可能性もある。これは、意味役割「目的地」についても同様である。ただし、英語のように場所や目的地に関して、その空間的属性の区別に応じた機能をもつ異なった形態素を使用する言語がある以上、普遍的な意味表示には、これらの属性が含まれるようにしておく必要はある。

2.2.3. 事態基

a. アスペクト

英語の動詞には、単純形(非進行形)と「be動詞＋現在分詞」の構造をもつ複合形(進行形)があつて、両者はアスペクトに関して対立している。このアスペクト対立は日本語と同様であつて、非進行形は事態の全体が成立したこと(全体相)を、進行形は事態の部分が成立したこと(部分相)

*13 日本語では、over や under は「上に」「下に」のように、名詞と格助詞を用いて表示されるし、along は「に沿って」のように、格助詞と動詞を用いて表示される。

を表示する。

アスペクト形式を含む動詞群の意味は、動詞語幹の表示する事態(集合)の性質(動作態)とアスペクト形式の機能を合成することによって得られる。このことから、reach(到着する)、die(死ぬ)などの、瞬間的に生起する事態を表示する動詞語幹に関しては、瞬間には部分がありえないため、本来的に部分相のアスペクト形式を付加することはできないはずである。

しかしながら、瞬間的に成立する事態を、その成立の時点で確実に認識することは、通常の認識能力をもつ人間には甚だ困難である。^{*14}たとえば、「太郎がゴールに到着する」という事態を知るときには、まず太郎がゴールに接近しつつあることを知り、次に同じ太郎がゴールの向こう側にいることを知るという二つの事態が関与してくる。すなわち、瞬間的に成立する事態に関しては、その事態に先行する事態(前事態)と、その事態の結果生じる事態(後事態)の両方を含めて我々は認識しているものと考えてよい。

瞬間的に成立する事態を、このような複合的な事態として捉えたとするならば、前事態と後事態は長さのある時区間において成立するから、いずれの事態にも部分がありうる。したがって、瞬間的事態を表示する動詞語幹に部分相のアスペクト形式を付加することができて、この時には、前事態もしくは後事態の部分が表示されることになる。

この場合、日本語では、以下の例に見るように、後事態の部分が表示される。

- (19)a. 列車は駅に到着している。
b. 道ばたで鳥が死んでいる。

一方英語では、同じ条件で前事態の部分が表示される。

- (20)a. Your train is reaching the station.
b. The patient is dying.

b. 時間関係

基準時点と事態成立時点の時間的な関係を表示する形式が時制であるが、英語の時制体系は日本語よりもはるかに複雑である。図示すると次のようになる。

^{*14} さらに、瞬間的な事態が発話時点において成立する時、その成立を言語によって成立と同時に伝達することもできない。なぜならば、たとえ成立と同時に事態の認識が起こったとしても、それを文によって表示するためには、必ず時間が必要だからである。

(21)

| | | |
|------|------|------|
| 過去 | 現在 | 未来 |
| | | |
| 過去完了 | 現在完了 | 未来完了 |

現在完了形を時制形式と見なすことができるかどうかについては議論があるが(町田2001)、過去完了と未来完了は、過去もしくは未来の基準時点よりも前に成立する事態を表示するのだから、明らかに時制としての機能をもっている。現在完了も、基準時点としての現在(発話時点)よりも前に成立する事態を表示するのだから、機能としては通常の時制形式と同様である。

問題となるのは、現在完了と同様に過去も、発話時点よりも前に成立した事態を表示するため、現在完了と過去の機能が、これだけでは正しく区別されないということである。しかし、過去時制形式の機能を、「発話時点より前の基準時点と同時」のように、基準時点の発話時点との関係と、事態そのものの基準時点との関係という、2個の成分によって定義することにすれば、機能の区別が可能になる。この方式を適用すれば、現在完了形式の機能は、「発話時点と同時の基準時点よりも前」となる。^{*15}

同様に英語の各時制形式の機能を構成する成分的特徴をあげるならば、以下のようになる。

| (22) 時制形式 | 基準時点 | 基準時点との関係 |
|-----------|---------|----------|
| 現在 | 発話時点と同時 | 基準時点と同時 |
| 現在完了 | 発話時点と同時 | 基準時点より前 |
| 過去 | 発話時点より前 | 基準時点と同時 |
| 過去完了 | 発話時点より前 | 基準時点より前 |
| 未来 | 発話時点より後 | 基準時点と同時 |
| 未来完了 | 発話時点より後 | 基準時点より前 |

c. モダリティ

英語のモダリティ表示のための形式は、大きく2種類に分類される。1つは、直説法と仮定法(接続法)という動詞そのものの形態的対立であり、もう1つは、法助動詞を動詞不定形(原形不定詞)の前に配置するものである。

動詞の法形式によるモダリティ表示に関しては、直説法によって事態が完全に真であることが、仮定法によって事態に成立可能性があることが表示される。すなわち、法形式は、事態が真

^{*15} 時制形式の機能のこのような定義の方法は、すでに Reichenbach(1947)において提示されている。ただし、この論考においては、基準時点の性格が明確にされていない。

であるかそうでないかという、二種類の可能性表示を区別するのみである(町田2002)。しかも、仮定法が主節で使用されるための条件は極めて限られているため、法形式による事態成立可能性の表示は、可能性の程度が離散的であることを考えると、必ずしも十分であるとは言えない。

これを補完するのが、法助動詞による可能性表示である。英語で事態の成立可能性を表示する形式としての法助動詞には、will, shall, may, must, should, ought to があり、willとmay にはそれぞれ would と mightという、起源的には過去時制を表示する形式があつて、可能性の程度を低める働きをしている。それぞれの法助動詞形式が表示する成立可能性の程度は異なるから、全体としては8段階の成立可能性の程度が英語では区別されることになる。

2.2.4. 事態の構造

以上の考察をもとにして、英語の文が表示する事態の構造をまとめると、次のようになる。

(23)英語の文が表示する事態の構造

事態基

アスペクト{全体、部分}

成立時間区間{基準時点:発話時点と同時・前・後、基準時点との関係:同時・前・後}

成立可能性{完全、可能性の程度8～1、不成立}

事態基の要素

主体、対象、受容者、関与者、同伴者、道具

場所{点、線、空間、先行、後行、近接、周辺、点的上方・下方、空間的上方・下方}

通過場所{点、線・空間}、目的地{一般、面、空間}、起点

3. 結論

日本語および英語が表示する事態の構造は、事態基が作る枠組みに実体集合が組み込まれるという、言語普遍的な特質を共有している。しかし一方で、文を構成するためにそれぞれの言語で用意されている形態素の種類の違いに由来する事態構造の違いも観察される。あらゆる言語の文が表示する事態を不足なく表示するためには、できるだけ多くの言語を分析する必要があるが、本論で考察した2つの言語に関する事態表示の構造を比較するだけでも、普遍的な事態表示の基礎とすべき項目の重要な候補はかなりの程度明らかになったと考えられる。

文を構成する形態素あるいは形態素群(時には文法的機能をもつ形態素配列規則)がもつ機能は言語ごとに異なるから、最終的に得られるはずの普遍的事態構造を構成する要素のすべてが、ある1つの言語によって表示されることはない。しかし、本論の冒頭でも述べたように、任意の言語から任意の別の言語への翻訳が可能であるという事実を考えるならば、明示的に観察される

形態素(群)だけでなく、形態素の間に見られる意味的關係、そしてとりわけ文が発話される状況を参照することにより、普遍的事態構造に近い事態構造が、任意の言語において表示されているものと考えてよい。

本論の結論として、日本語と英語の各言語で表示される事態構造を組み合わせたものを、普遍的事態構造を求めるための基礎として掲げる。

(24)英語と日本語が表示する事態構造

主題

事態基

アスペクト{全体、部分}

成立時区間{基準時点:発話時点と同時・前・後、基準時点との関係:同時・前・後}

成立可能性{完全、可能性の程度8～1、不成立}

事態基の要素

主体、対象、受容者、関与者、同伴者、道具

場所{点、線、空間、先行、後行、近接、周辺、点的上方・下方、空間的上方・下方}

通過場所{点、線・空間}、目的地{一般、面、空間}、起点

成立時区間{過去、現在、未来}

同時的に表示される事態

参考文献

- BLOOMFIELD, Leonard. 1935. Language. London : G. Allen & Unwin
- COMRIE, Bernard. 1977. Aspect. Cambridge University Press
- DOWTY, David R. 1991. Thematic proto-roles and argument selection. Language 67-3: 547-619
- 飯田隆 1997. 『ウィトゲンシュタインー言語の限界』講談社
- 池上嘉彦 2000. 『日本語論への招待』講談社
- 風間喜代三他 1994. 『言語学』東京大学出版会
- 木下りか 1998. 「ヨウダ・ラシイー真偽判断のモダリティの体系における推論ー」『日本語教育』96
- 工藤真由美 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 町田健 1989. 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 町田健 1997. 「形容詞の意味について」『北海道大学文学部紀要』第45巻第3号: 247-272.
- 町田健 1999. 「主体を表す「は」と「が」の意味的機能について」『名古屋大学言語学論集』第15巻:197-245
- 町田健 2001. 「外国語との対照から時制をとらえる」『言語』30-13:18-25.
- 町田健 2002. 「文の中での動詞の役割」『言語』31-11:32-39.
- 益岡隆志, 田窪行則 1992. 『基礎日本語文法ー改訂版』くろしお出版
- MONTAGUE, Richard. 1974. Formal Philosophy. New Haven: Yale University Press
- 野田尚史 1996. 『「は」と「が」』くろしお出版
- PALMER, F.R. 1986. Mood and modality. Cambridge: Cambridge University Press
- ライヘンバッハ、H. (石本新訳)1982. 『記号論理学の原理』大修館書店
- SAUSSURE, Ferdinand de. 1916. Cours de linguistique generale. Paris: Payot
- WITTGENSTEIN, Ludwig. 1918. Tractatus logico-philosophicus. in Werkausgabe Band1(1988). Suhrkamp